

「かみさまからのおくりもの」

ルカによる福音書 15 章 11～24 節

聖学院大学 人文学部 112A 小林 あゆみ

今お読みいただいた箇所は、無鉄砲に父親の元を離れていった息子が、父の大切な財産を無駄遣いしてしまったために途方に暮れて親元に帰ってくる、という情けない話でした。現実的に考えれば、仮に勤当されてしまっても仕方がないことなのかもしれません。しかしこの物語に出てくる父親は、帰ってきた息子を温かく迎え入れました。この優しい父親こそ神様に例えられています。私のこれまでの人生はこの息子そのもの、いわゆる放蕩娘だったと思っています。

私は幼稚園児のころから教会に通い始めました。当時は教会に行ったり、聖書の話の聞いたりすることに何の抵抗も感じませんでした。ただ素直に神様を信じていました。ところが小学校に入学し、学年が上がるにつれて、教会に通っている自分が恥ずかしくなっていました。周囲で教会に通っている友達は一人もいなかったからです。友達が遊びに来るときは、よく聖書や讃美歌を隠したものでした。中学、高校でも教会に通っている友達と会うことはなく、教会でも同年代の友達はいませんでした。学校では明るく振舞っていた一方、心の内では自分が教会に行っていることが知られたら馬鹿にされるのではないかと、いつも恐れていました。特に高校時代は皮肉にも教会が通学路にあり、大変目立っていたので尚更でした。このような経験から、日本の人口の 1%にも満たないクリスチャンになることはマイリティに属することだとわかっていたので、絶対にクリスチャンにはならない！と心に決めていました。

そのような私が、洗礼を受けようと思ったのは大学 2 年生の時でした。編入したばかりで友達もできず、この先どうなるのか、という不安を抱えていましたが、日々の礼拝の中でありのままの自分でいて良いことを教えられ、その不安は癒えていきました。その年の夏、初めてトリートに参加しました。知り合いはほとんどいませんでしたが、楽しく活動したり、テーマについて意見交換をしたり、たった 1 泊でしたが沢山のひとと交流を深めることができました。その後のトリートでは、実行委員として運営を担うという貴重な機会もいただきました。初めてのことが多く、企画する側の難しさはありましたが、それ以上に仲間と共に祈りながら、一つのものを創りあげることの充実感を味わいました。今まで頑なに神様の存在を拒否し続けてきた私でしたが、このような経験を通して神様のもとに帰っていくような感覚を覚えました。そして 2013 年 12 月に洗礼を受けました。

キリスト教では「救い」という言葉が使われるせいか、クリスチャンになったら全てが上手くいくというイメージを持っている方がおられるかもしれません。洗礼を受けてから 3 年が経とうとしていますが、半分は当たっているなと思います。昨年夏からフィリピンとオーストラリアに留学していました。ところが、フィリピンに着いて間もなく 1 か月間寝込むほど体調を崩しました。帰国するかどうかという瀬戸際まで行きましたが、その時ばかりはこれから先がどうなるのか、祈ることしかできませんでした。しかし体調が回復すると、そこからはまた沢山のひととの出会いがありました。フィリピンでは父の元同僚の方に大

変お世話になり、小さい頃 1 度会ったきりにも関わらず、明るく迎えてくださいました。また現地の人と知り合ってみたいという思いから、教会に行ってみることにしました。300 人以上の信徒に日本人 1 人という中で礼拝を守り、牧師や教会員の方に声をかけていただき、フィリピンの文化や生活の知恵など様々なことを教えていただきました。

オーストラリアではホームステイ先のすぐ近くに小さな教会がありました。住宅街にポツンと建っていたので緊張しつつも、勇気をもって礼拝に参加してみることにしました。弱冠 20 歳の小娘がバックパッカー一つで突然現れたので、最初に足を踏み入れた時にはかなり驚かれましたが、毎週共に礼拝を守る中で、親しくなることができました。今でもメールや Facebook で交流しています。この留学は新しい世界へ飛び込む勇気を与えてくれました。

聖学院大学に入学して、洗礼を受けて、留学をして、今に至るまで万事上手くいったということは一度もありません。むしろ自分が予想していたものとは全然違っていました。しかし、神様が救ってくださったのかなと感じる瞬間は多くあります。それは体調を崩したり、後悔したり、悩んだりする度に、礼拝で新しい価値観に触れることができたり、友達や先生方、家族の何気ない行動や言葉に勇気づけられたりする時です。こういう意味で「救い」というのは神様からのプレゼントなのかもしれません。

最後にビートルズの有名な 1 曲に、“Let it be.”「あるがままに」という曲があります。しかし、「あるがままに生きていこう」というのは先が見えず、どこか不安を覚えるのではないのでしょうか。そのようなとき、何かを心の軸として信じていくことは一つの強さになるように思います。「かみさまからのおくりもの」と題をつけましたが、私の場合はその軸こそが神様が与えてくださったイエス・キリストなのです。

2016年5月24日 聖学院大学 全学礼拝（学生の証し）